

地域アンシエーションの芽(87)

京都大学名誉教授 本山美彦

種子をめぐる勢力(33)

イランを知る(その2)

不明なイラン人の惨状

イラン市民の窮状が、ニュースとして日本に入ってきて来ない。理由は分からない。最も知りたいことが伝わっていない。

「さすがの研究員」と

名乗る論者が、2023年1月からのイラン滞在記の一文で、想像をはるかに超えたイラン市民の惨状を私は知った。それ以前も以後も、イラン住民の経済的な苦境に関するデータを得ることができないでいる。

同氏の体験したことを以下に要約する。

(1) 西側諸国で発行されているクレジットカードは使えない。

(2) 為替相場の下落が急激である。2019年8月に1円≒1000リヤル(イラン通貨)だったものが、2023年1月には1円≒3000リヤルになった。

(3) 市中はおろか、国際空港でも、両替商には現金がない。そのせいで、リヤルの入手ができない。

(4) 通信に必要なSIMカードが手に入らない。

(5) 日本からイランへのパソコンの持ち出しは、日本の経済産業省と米国の商務省によって厳しく制限され、持ち出し許可手続きに時間がかかる。スマホも同様。

以上(同氏「或る農業研究員の放浪記(1)」『農村高額研究部門メールマガジン』第179号(2025年4月号)。

イランは、「イラン高原」(Iranian Plateau)と呼ばれている、非常に高い山々に囲まれた平均700メートルの標高の三角状の盆地の中である。

高原の北部には、中東で最高峰(標高5610メートル)の「ダマーヴァンド山」(Mount Damavand)を擁する「アルボルズ山脈」(Alborz Mountains)がある。ダマーヴァンド山は、イランの最高峰であり、アジアで最も高い活火山である。カスピ海の南岸から約70キロメートル南、そしてテヘランの北東66キロメートルに位置する。イランにおける伝説や神話をもち、特別な場所とされる山である。

南西部には、「ザルド・ク」(Zard Kuh、標高4221メートル)「黄色い山」という意味)がそびえている。この山は、石灰岩や堆積土壌が多く、太陽の光を浴びて山肌が黄色っぽく輝いて見えることからこの名で呼ばれている。

イラン高原は、山々に遮られて湿気が届かないため、「カビール砂漠」(Kavir Desert=Dast-e Kavir)などの乾燥地帯が広がっている。この地名はペルシア語で「低い平原」という意味である。

国土のほとんどが乾燥した砂漠で占められているにもかかわらず、イランは、800万人の人口の主食である小麦をほぼ自給できる農業大国でもある。年度によって違うが、自給率は60%から100%の間を行き来している。

小麦生産量は、平均で年間1000万トン以上と世界有数である。ただし、小麦以外の穀物(飼料用穀物や米など)を含めた穀物全体の自給率は約46%前後にとどまっている。

それでも、イランには、サフラン、ヒスタチオ、ゼレシク、ナツメヤシ、アーモンド、サクランボ、スイカ、レモン、ザクロなど様々な果実があり、30品目の生産に於いては、世界の上位20か国に入っている(<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2018/> Autonomous Region)の「坎児井」(カンアルチン、(Khanjing)と呼ばれる用水路も、イランから伝播した技術と推測されている。韓国の「プンヌボ」、日本の「マンボ」と発音される古代からの水利施設もカレーズを伝承したものであるとの節もある。

カナートは、イランより西にも伝播した。「オマーン」(Oman)周辺へは、ペルシアの勢力が及んだ紀元前6世紀頃に伝わったと言われ、「アフラジ」(Afari)という名称になっている。このアフラジが、カナートとして、2006年に最初のユネスコの世界遺産に登録されている。

「アラブ首長国連邦」(United Arab Emirates=UAE)を構成しつづける7つの「首長国」(Emirate)の1つである「アブダビ首長国」(Emirate of Abu Dhabi)の第2の都市「アル・アイン」(Al Ain)周辺にも17個のカナートが点在している。このカナートも2011年にユネスコの世界遺産に登録された。

北アフリカの「サハラ砂漠」(Sahara Desert)にはアラビアから「フォガラ」(Foggarat)と呼ばれる用水路が伝わった。

イランの分も含めた、世界中にあるカナートの総数は5万とも言われる。そのうち、発祥地となったイランに残るカナートの数は、約4万もあり、世界のカナートの遺跡の8割を占めている。しかし、イランのカナート、11個の「ペルシアン・カナート」(Persian Qanat)が世界遺産に登録されたのは、比較的遅く、2016年になつてからである(https://en.wikipedia.org/wiki/Persian_Qanat)。

ペルシアン・カナート(ペルシア式カナート)の世界遺産認定が一度「登録延期」となった主な理由は、2つの地域のカナートがすでに世界遺産に登録されており、この遺産ならではの「突出した独自の価値」(Outstanding Universal Value)の証明が十分と見なされたからである(<https://whc.unesco.org/a/list/1506>)。

しかし、2016年の世界遺産登録認定文には、現在でも使用されていることが強調されている(<https://whc.unesco.org/en/list/1608>)。

林則徐とカレーズ

「アヘン戦争」(Opium War)を起して、その戦いに敗れた責任を取らされて、新疆の「イリ」に追放されることになった「林則徐」(Lin Zexu、1785≒1850年)は、1845年、そのイリに向かう途中の「トルファン」(Tufan)で、天山山脈の雪解け水を地下から引くカレーズ(坎児井)の仕組みを初め

カナート断面図



イランは、西側諸国から「ペルシヤ」(Persia、英語では「ペーシヤ」と発音)と呼ばれるようになってきた。「ペルシヤ」という呼称は、古代ギリシヤ人が、イラン高原の住人を「ペルシス」(Persis)と発音していたことに起因する。現地の

住人たちは、古代から自らを「イラン」=「アリア人の国」(Land of the Aryans)の人間と呼んでいた。1935年より前には、イランは国名を「ペルシヤ」としていたが、1935年に「イラン帝国」(Imperial State of Iran)となり、1979年に「イラン・イスラム共和国」(Islamic Republic of Iran)となった。

イラン高原は、山々に遮られて湿気が届かないため、「カビール砂漠」(Kavir Desert=Dast-e Kavir)などの乾燥地帯が広がっている。この地名はペルシア語で「低い平原」という意味である。

国土のほとんどが乾燥した砂漠で占められているにもかかわらず、イランは、800万人の人口の主食である小麦をほぼ自給できる農業大国でもある。年度によって違うが、自給率は60%から100%の間を行き来している。

小麦生産量は、平均で年間1000万トン以上と世界有数である。ただし、小麦以外の穀物(飼料用穀物や米など)を含めた穀物全体の自給率は約46%前後にとどまっている。

それでも、イランには、サフラン、ヒスタチオ、ゼレシク、ナツメヤシ、アーモンド、サクランボ、スイカ、レモン、ザクロなど様々な果実があり、30品目の生産に於いては、世界の上位20か国に入っている(<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2018/> Autonomous Region)の「坎児井」(カンアルチン、(Khanjing)と呼ばれる用水路も、イランから伝播した技術と推測されている。韓国の「プンヌボ」、日本の「マンボ」と発音される古代からの水利施設もカレーズを伝承したものであるとの節もある。

カナートは、イランより西にも伝播した。「オマーン」(Oman)周辺へは、ペルシアの勢力が及んだ紀元前6世紀頃に伝わったと言われ、「アフラジ」(Afari)という名称になっている。このアフラジが、カナートとして、2006年に最初のユネスコの世界遺産に登録されている。

「アラブ首長国連邦」(United Arab Emirates=UAE)を構成しつづける7つの「首長国」(Emirate)の1つである「アブダビ首長国」(Emirate of Abu Dhabi)の第2の都市「アル・アイン」(Al Ain)周辺にも17個のカナートが点在している。このカナートも2011年にユネスコの世界遺産に登録された。

北アフリカの「サハラ砂漠」(Sahara Desert)にはアラビアから「フォガラ」(Foggarat)と呼ばれる用水路が伝わった。

イランの分も含めた、世界中にあるカナートの総数は5万とも言われる。そのうち、発祥地となったイランに残るカナートの数は、約4万もあり、世界のカナートの遺跡の8割を占めている。しかし、イランのカナート、11個の「ペルシアン・カナート」(Persian Qanat)が世界遺産に登録されたのは、比較的遅く、2016年になつてからである(https://en.wikipedia.org/wiki/Persian_Qanat)。

ペルシアン・カナート(ペルシア式カナート)の世界遺産認定が一度「登録延期」となった主な理由は、2つの地域のカナートがすでに世界遺産に登録されており、この遺産ならではの「突出した独自の価値」(Outstanding Universal Value)の証明が十分と見なされたからである(<https://whc.unesco.org/a/list/1506>)。

しかし、2016年の世界遺産登録認定文には、現在でも使用されていることが強調されている(<https://whc.unesco.org/en/list/1608>)。

林則徐とカレーズ

「アヘン戦争」(Opium War)を起して、その戦いに敗れた責任を取らされて、新疆の「イリ」に追放されることになった「林則徐」(Lin Zexu、1785≒1850年)は、1845年、そのイリに向かう途中の「トルファン」(Tufan)で、天山山脈の雪解け水を地下から引くカレーズ(坎児井)の仕組みを初め

林則徐は、生涯にわたり各地を歴任し、卓越した治績を残した。西洋の侵入に抵抗した一方、西洋の文化、科学技術、貿易に対しては開かれた態度を持ち、その優れた点を学び活用することを主張した(https://baik-e.baidu.com/a/item/林则徐_985792)。



ダマーヴァンド山

カナート

砂漠地帯であるにもかかわらず、有数の農業国であるイランを支えてきたのは、古代ペルシヤ時代から存在してきた「カナート」(qanat)という伝統的な水利施設であった。

イラン高原は、山々に遮られて湿気が届かないため、「カビール砂漠」(Kavir Desert=Dast-e Kavir)などの乾燥地帯が広がっている。この地名はペルシア語で「低い平原」という意味である。

国土のほとんどが乾燥した砂漠で占められているにもかかわらず、イランは、800万人の人口の主食である小麦をほぼ自給できる農業大国でもある。年度によって違うが、自給率は60%から100%の間を行き来している。

小麦生産量は、平均で年間1000万トン以上と世界有数である。ただし、小麦以外の穀物(飼料用穀物や米など)を含めた穀物全体の自給率は約46%前後にとどまっている。

それでも、イランには、サフラン、ヒスタチオ、ゼレシク、ナツメヤシ、アーモンド、サクランボ、スイカ、レモン、ザクロなど様々な果実があり、30品目の生産に於いては、世界の上位20か国に入っている(<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2018/> Autonomous Region)の「坎児井」(カンアルチン、(Khanjing)と呼ばれる用水路も、イランから伝播した技術と推測されている。韓国の「プンヌボ」、日本の「マンボ」と発音される古代からの水利施設もカレーズを伝承したものであるとの節もある。

カナートは、イランより西にも伝播した。「オマーン」(Oman)周辺へは、ペルシアの勢力が及んだ紀元前6世紀頃に伝わったと言われ、「アフラジ」(Afari)という名称になっている。このアフラジが、カナートとして、2006年に最初のユネスコの世界遺産に登録されている。

「アラブ首長国連邦」(United Arab Emirates=UAE)を構成しつづける7つの「首長国」(Emirate)の1つである「アブダビ首長国」(Emirate of Abu Dhabi)の第2の都市「アル・アイン」(Al Ain)周辺にも17個のカナートが点在している。このカナートも2011年にユネスコの世界遺産に登録された。

北アフリカの「サハラ砂漠」(Sahara Desert)にはアラビアから「フォガラ」(Foggarat)と呼ばれる用水路が伝わった。

イランの分も含めた、世界中にあるカナートの総数は5万とも言われる。そのうち、発祥地となったイランに残るカナートの数は、約4万もあり、世界のカナートの遺跡の8割を占めている。しかし、イランのカナート、11個の「ペルシアン・カナート」(Persian Qanat)が世界遺産に登録されたのは、比較的遅く、2016年になつてからである(https://en.wikipedia.org/wiki/Persian_Qanat)。

ペルシアン・カナート(ペルシア式カナート)の世界遺産認定が一度「登録延期」となった主な理由は、2つの地域のカナートがすでに世界遺産に登録されており、この遺産ならではの「突出した独自の価値」(Outstanding Universal Value)の証明が十分と見なされたからである(<https://whc.unesco.org/a/list/1506>)。

しかし、2016年の世界遺産登録認定文には、現在でも使用されていることが強調されている(<https://whc.unesco.org/en/list/1608>)。



林則徐